



宿の主人と、泊まり客たちは、庭から建物のおすみまで、一生懸命捜しましたが、やはり見つかりません。(次のページは半分抜き)：

⑥ 飛脚「あー、もうこれまでだ。私の人生は終わりだ。ウウツ。」
とうとう、飛脚は泣き出しました。

みんな「かわいそうだけど、そんな大金はもう返ってこないよ。」

みんな、気の毒そうに飛脚を見ながら、言いました。

…(ここで、全部を抜き)：

その時です。ハア、ハアと息を弾ませながら宿屋に飛び込んできたのは又左衛門。飛脚の顔を見つけると、大声でたずねました。

又「飛脚さあん。何か忘れ物をされませんでしたか。」

飛脚「お殿様から預かった大事なお金をなくしてしまったのです。何か知りませんか。」

⑦ 又左衛門は、流れる汗も拭わず、体にくくりつけていた包みを大急ぎで開けて見せました。



又「飛脚さん。これと違いますか？家に戻って、馬の鞍をはずしていたら、その間から落ちてきたのです。」

飛脚「そ、それです！、それです！」
言うなり、飛脚はへなへなと座り込んでしまいました。

又「きつと、飛脚さんのや、困っておられるやろうと思つて、大急ぎで来ました。……ああ、来て良かったです。それでは、中身をしっかりと確かめてください。」

飛脚は、震える手で袋のお金を数えました。お金はきつちり二百両ありました。

飛脚「はい、二百両、確かにあります。」

飛脚は、袋を手にし、心から喜んでポロポロ涙を流しました。



⑧ 飛脚「ありがとうございます。ございました。あなたは、私の命の恩人です。」

飛脚は、何度も何度も、おじぎをしてお礼を言いました。周りにいた宿の主人やお客たちは、手をたいて、自分のことのように喜びました。



⑨ 又「飛脚さんに会えて、本当に良かった。会えなかったらどうしようかと、心配しましたんや。……ああ、ほつとしました。それでは、これ心安心して帰れます。じゃあ。」

大金を飛脚に渡した又左衛門は、帰ろうとしました。飛脚は、あわてて、別の財布から十五両を取り出しました。

飛脚「馬方、ちょっと待つてください。命の恩人には少ないのですが、お礼にこれをどうぞ、受け取ってください。」

又「私は飛脚さんの大事なお金を届けに来たんです。当たり前のことをしていただけです。お礼はいりません。」

又左衛門は受け取ろうとしません。飛脚は、十五両を十両に、五両に、それでは一両だけでもと、少なくしても、馬方は「いらぬ」と言うのです。周りにいるお客たちが言いました。

みんな「飛脚の気持ちだから、少しはもらつてあげなさいよ。」

又「それなら、今ごろは休んでいるところを、ここまで届けた駄賃(運び賃)に二百文(約五千元)いただきませう。」

みんな「たったの二百文かい。」
みんなは、又左衛門の言葉に、思わず声を上げました。



⑩ 又「宿屋のご主人、すみませんが、私はこの二百文で、飛脚さんと、いっしょにお酒が飲みたくなりまして。どうぞこのお金でお酒とおつまみを用意していただけますか。」
宿屋の主人は、喜んで酒とつまみを運んで

きました。又左衛門は、みんなにお酒をすすめて、自分もおいしそうに飲みました。主人もお客たちも、喜んでお酒を飲みました。

⑪ 飛脚「馬方は、心のきれいな人ですな。感心しました。どこのどなたですか。」

又「飛脚さんが馬に乗られた川原市の者です。名を名乗るほどの者ではありません。」

飛脚「あんな遠くから、届けてくださったのに、礼もいらぬというのは、どうしてですか？」

又「たいへんな忘れ物だったので、きつと、お客さんが困つておられるだろうと、心配して急いで来ました。……ただ、私は尊敬している先生の所で、いつもいつも良い話を聞かせてもらっています。私だけではなく、たくさんの方が、先生から聞いたことを思い出して、正しいことを行うようにしています。」

飛脚「その先生というお方は、どなたですか。」



又「川原市の近くの小川村という所に、中江藤樹先生というお方がおられます。先生から『正しいと思うことを行いなさい、親を大切にしなさい、正直に暮らさなさい。』などと、教えてもらっています。」